外国人の受入拡大

溶接事業所の取り組み

菊川工業（東京都）――ベトナム人技能実習生を高く評価

深刻度合いを増す産業界の人手不足を背景に今年4月1日から外国人労働者の受入拡大に向けた新制度がスタートした。新制度には、外国人労働者が従事する仕事の対象に溶接が含まれており、造船をはじめ、素形材産業、産業機械製造業、電気・電子情報関連産業などで外国人溶接士の活躍が期待されている。新連載で、外国人労働者を抱える溶接事業所などを訪問し、外国人溶接士の現状に迫る。

◇

建築物の金属製内外装工事を手がける菊川工業（東京都墨田区、宇津野嘉彦社長）は、千葉県北部の白井工業団地に生産拠点を構える。外国人従業員は20人で、このうち3人は社員、残る17人がベトナムからの技能実習生で溶接による組立（11人）や工作機械による機械加工（6人）などに従事する。

毎年4―6人受け入れ合計17人

2014年にベトナムへの生産拠点設立に向けた準備の一環として同国の技能実習生の受け入れをはじめたのが契機。その後、東京五輪関係など受注量の増加にともなって、人手不足を補うために毎年4―6人の実習生を受け入れる。

「実習生は真面目で一生懸命なので仕事を覚えるのが早い」（同社総務部次長＝野中智典氏）と同社では、実習生の仕事ぶりを高く評価。実習生の先輩が残したベトナム語のマニュアルなどもあるため、工作機械の操作程度なら早い者では半年程度で覚え、一人で仕事ができるようになる。

溶接についても比較的簡単な下地程度であれば、約1年でできるようになる。ただ、要求品質の厳しい仕事が多い同社で一人前の溶接技能を身につけるには、どうしても3年ぐらいの経験が必要になる。つまり、技能実習期間は原則3年（優良な実習実施者・監理団体は2年の延長が可能）であり、溶接の場合、ちょうど一人前の技能を身につける頃に帰国する。

そこで同社では「できるだけ多くの実習生の実習期間を延長したい」と

アルミのティグ溶接を行うグエンさん

生活環境にも細かな気配り

し、実習生が気持ちよく働き、学べるようにするために職場環境のほか、生活環境の構築にも気を配る。

昨年は実習生が多く生活する社員寮をリニューアルしたほか、寮と職場を結ぶ送迎バスの運行も始めた。また、寮のイベント（クリスマス会など）や社内の部活動などを通して実習生と社員の親睦も深めている。

もちろん、外国人労働者受入拡大の新制度の導入も検討。「建築金物を製造する当社にとって最も身近な産業は建設業であるが、残念ながら新制度の建設産業の中に当社が該当する業種はない。そこで製造業の中にある素形材産業として新制度を活用できないかと考えている」

実習期間を延長した実習生の一人、グエン・チ・タインさんは「日本でアルミのティグ溶接を学び、少しだけ自信もついた。しかし、全てを学んだわけではない。チャンスがあるならもっと日本で腕を磨きたい」などとし、実習修了後も日本での就労を希望している。